「Song for」

経済学部
経済学科 2年
伊藤 洋佑

【一】

人通りが全くない真夜中の時間帯。灯りをなくして寂しさが溢れるビルなどが周りに林立してあり、道路を駆ける車の通りも少ない。空には漆黒のカーテンがかかっており、小さな宝石の粒を散ばさせながら三日月が顔を出していた。

その夜空の下、どこから歌声が聴こえてくる。

一つのぼんやりとした街灯の下に一人の女性が歌っていた。

とても伸び伸びとした爽やかな声が夜風に乗って流れていく。何も楽器を持っていなかったのだが、その声を聴くだけでも惹かれるものが込められていた。

キミを探して
ここまでやってきたんだ
もう一回
想い出を繋いで
明日へ共に歩いていこう

気持ち良さそうに歌っている彼女に一人の男が近づいてきた。顔を赤くさせながらよろよろと不安定な歩き方を見せているところから酔っ払いのようであった。不機嫌を顔に刻み込みながら、彼女の方へと歩み寄ってくるとこう言った。

「うっせんだよぉっ!!」

その男が怒鳴り散らすと彼女はビクッと背筋を震わせる。男は罵倒を浴びせただけで、他には手を出すといったことなどは何もせずにその場を去っていった。そして残された彼女は寂しそうな顔を浮かべながら、その男の背中を見つめていた。

【二】

頭が痛い。

そんな感覚と共に一人の男が目を覚ました。身の丈は百八十を超えていて体格がしっかりとしている。今は小豆色のジャージを身に包んでいた。

茶色に染まった短髪をポリポリと掻きながら辺りを見渡す。八畳ほどの狭い部屋には、食べ終わってそのままにしてあるカップ麺の容器や、飲み終えてそのまま放置してあるペットボトルにビール缶……他にも読みかけの雑誌やらなんやら、部屋は乱雑としていた。足の踏み場もないと言っても過言ではない。

「そういや……昨日は久しぶりに飲みすぎたんだっけ。はぁ……ってぇー。頭いってー」

自分が招いた二日酔いにぼやきながら、その男は再び気だるそうに寝転がった。掃除も換気もろくにしていない部屋に漂うのは鼻が少し曲がりそうな臭い。はっきり言って、衛生面に問題ありの部屋だったのだが、男は面倒くさそうな顔を浮かべながら、昨日のことを思い出していた。

昨日、男はなんかむしゃくしゃしていた。原因はさておき、とりあえずイライラを募らせていた男はバイト先である駅前のとあるコンビニでちょっとした事件を起こした。

普段通り、男はレジ打ちをしていた。その仕事

中に一人のガラの悪そうな客が雑誌に虫が止まったの、この店の衛生面がどうなのと、いちゃもんをつけてきたのである。たださえイライラしているというのに、その上に話でよく聞くようなうるさい姑のように細かいことを延々とぐちぐち言われ、遂に男の怒りの沸点が限界を超えた。男はいきなりその客の胸倉を掴むと、思いっきりその頬に、力強く握り締めた拳を叩き込もうとしたが……たまたま近くにいたもう一人の店員に押さえつけられ、大事には至らなかった。

その後、店長が代わりに客に非礼を詫びた後、男は店長から「アナタ最近、集中力がないでしょ〜う。頭が冷え切るまで出入り禁止、いいわね？本当ならクビなところだ・け・ど、ワタシってば優っすぃー」と言われてしまったのである。それからふて腐れた男は行きつけの居酒屋に足を運び、「うっせえんだよ、余計な世話なんだよ、あんのオカマ店長が――」と愚痴を呟きながらずっと飲み続けていた。

そして、今――二日酔いに悩まされながらベッドに横たわっているに至るということである。男は天井を眺めながら、昨日といい、最近どうして自分がこんなにもイライラを募らせているのかを考えてみた……そして思い出して苦虫を噛みつぶしたような顔を男は浮かべた。

【三】

男には夢があった。

それは有名なミュージシャンになる夢だった。

もちろん親には反対された。「お前には無理だ」「それで食っていける人なんてそんなにいないのよ？」と散々、耳にタコができるほど、説教をかまされた。しかし男は自分の意志を曲げることはしなかった。若干、古びたアコースティックギター一本片手に、男は夢に向かって上京した。最初は慣れない都会生活に戸惑いながらも、それでも自分なりにしっかりとバイトをこなしつつ、駅前で路上ライブみたいなことを続けてきた。中々、歩みを止めて自分の歌を見てくれる人がいない、バイト先の店長はオカマ、クレーマーな客、抜け出せる気配のない貧乏生活、他諸々。不満もたくさんあったが、毎日が充実していたような気がした、順調にことが進んでいると思っていた。

あの日が来るまでは。

「キミは何で歌っているのかね？」

いつものように人通りのある駅前で路上ライブをしているときだった。男の音楽を聴いていた一人の黒いスーツ姿をまとったおじさんが尋ねてきた。男はその問いに当然のように「え、どうしてって。有名なミュージシャンになる為っすけど」と答えると、スーツ姿のおじさんは苦笑いを浮べて、こう言った。

「なるほどね。志を高く持つのはいいことだ」

「……どうもっす」

「だけどね、キミには無理だよ」

「はっ？」

「キミの歌からには何も感じられないんだよ。正直に言うとね。それが自分で分からない以上、キミには無理だと思うな。私は」

それだけ言うと、スーツ姿のおじさんは「まぁ、頑張りたまえよ」と最後に一言残して去っていった。男は何も言えないまま、ただそこに立っていたままであった。

それ以来、男の調子はガタ落ちした。何をしていてもあのスーツ姿のおじさんが放った言葉が脳裏から消えない。自分は何も悪いことなんかしてないのに、なんでこんなにも責められるようなことを受けなければいけないのだと。あれからギターには指一本触れてない、音楽も聴いていない、何をするにも気力がない、まさに、ないない尽くしの生活が男に訪れているのであった。

「……頭いってぇし。二度寝するか」

頭をポリポリと掻きながら男は再び重そうな眼を閉じた。それはまるで、何かから逃げるかのよ

うな、そんな感じのものであった。

【四】

どれぐらい寝ただろうか。

男が気だるそうに目を覚ます頃には、辺りはすっかり真っ暗になっていた。男はとりあえず立ち上がり、電気をつけようと歩き出す。散らかり放題の腐海の中を泳いでいき、ようやくスイッチを見つけ、押したとき――。

ピンポーンと呼び鈴が一つ鳴いた。

男は「面倒くせぇ」とぼやきながらも玄関に向かい、「どちら様？」と尋ねた。

「鳴原愛璃（なるはらあいり）だよ」

「は？」

男は訳が分からないといった顔を浮べた。鳴原愛璃？そんな奴知らない。いや仮に忘れているだけかもしれないが、今は思い返そうということすらしたくないほど、男はだるかった。扉越しで「あのぉ……」という声が聞こえてくる

「セールスならお断りだっつうの、ボケ。さっさと帰んねぇとブッとばすぞ!?」

男がそう怒鳴り散らすと、もう扉越しから声は届かなくなった。男はやれやれと呟きながら部屋に戻ると、散らかった部屋の中から未開封のカップラーメンを取り出し、それから洗い場の隣にある小さなコンロに火をつけた。換気扇も忘れずにつけておく。

あのセールスめ、こんな時間に迷惑な話だと男は思いながら水が沸くのを待っていた。さてラーメン食べたら何をしようかと男は思った……しかし何もすることがない。何をしたいというのも沸かない。

「……」

結局、カップラーメンを食べ終わった後、男は部屋の電気を消し、布団の中に入って、眠りをむさぼることにしたのであった。

「て……ちゃ……て……ちゃん」

誰かの声が聞こえる。

女性の声だろうか、なんだか懐かしいような、そんな感じの声だった。

男がその声に導かれるように目を開けると部屋の明かりはつけられており、そこにいたのは一人の若い女。身の丈は１５０後半、黒い髪を腰まで垂らしており、赤いふちの眼鏡をかけていた。

「誰だ……てめぇ……？」

むくりと上半身だけを起こし上げた男は怪訝そうな顔を女に向けた。鍵は多分かけたはず……もしかしてこの女、泥棒か、ピッキングとかで侵入してきたのかと男が思ったときのことだった。

「良かった、やっと、てっちゃん起きてくれた！」

その女が笑顔でそう言ってきて、「てっちゃん」と呼ばれた男は目を丸くする。てっちゃんという言葉……どこかで聞き覚えがあるような、ないような……男が何か頭に引っかかるような感覚を覚えた。いつの間にか二日酔いによる頭の痛みはどこかに消えていた。

「鳴原愛璃だよ、てっちゃん。覚えてない？」

「あ……!!」

男の頭がようやく答えにたどり着いた。

男には歳が一つ違いの幼馴染みがいた。鳴原愛璃という女である。彼女とは母親の井戸端会議についていった際に出逢い、それ以降、愛璃は男の傍にいつもついていった。いつでもどこでも笑顔を絶やさない女で、男には時々「何、へらへらしてんだよ」とおでこをつつかれたときもあった。

「もう、てっちゃんったら、鍵開いてたよ？　ちゃんと閉めなきゃ駄目じゃない」

「だからって勝手に入ってくることねぇだろ。俺が思い出さなかったら、今頃、お前、警察行きだったぞ。警察行き」

「ごめんごめん」

「それにしてもてめぇ……こんなところまで何し

にきたんだよ？」
「え、ちょっと。てっちゃん頑張ってるかなぁ……って思って来たんだけど……」
愛璃は辺りを見渡すと苦笑いを男に向け「これはヒドくない？」と言った後に、あるものに指を指して、一つ、男に尋ねた。
「最近、ギター弾いてる？　なんかゴミ溜めみたいな場所にほっぽり出されたままだけど」
「……」
「……ねぇ、てっちゃん。久しぶりにてっちゃんの歌、聴きたいな」
「……」
「ねぇ、てっちゃん。歌を――」
「うっせんだよぉ！」
男の怒号に愛璃は驚いて背筋を強張らせた。男はハァハァと肩で息をしながら体を心と共に震わせながら撒き散らすかのように言い放った。
「夢追いかけて、ここまでやってきて、結局自分は駄目なことに気付かされて！もう音楽は止めたんだよ、俺は！笑えるだろ？あんなにミュージシャンになりたいってホザていた自分が馬鹿馬鹿しくてよ！」
「てっちゃん……」
「なんだよ？　お前。笑いたきゃ笑えよ」
しかし愛璃の顔に笑みが刻まれることはなく、代わりに一筋の感情が彼女の頬を伝っていった。それが一つ、二つ、床へと滴り落ちていく。
「ねぇ……てっちゃん」
「もう帰れよ、さっさと帰れよ。もう――」
「てっちゃんのバカァ!!」
今度は愛璃の怒号が響き渡った。いきなり張り上げた彼女の声に男は一瞬驚いた。
「そうやって、すぐに諦めようとしないでよ！ここに来るときのてっちゃん、すごいカッコ良かったのに……ねぇ、てっちゃん。そんなこと言ってたら、あのおじさん泣いちゃうよ？」
「あの、おじさん……？」
「あのギターくれた、おじさんだよ」

【五】

それは男が上京する前の――男がまだ小学生だった頃の話。
男がいつものようについてくる愛璃と公園で遊んでいたときのこと、ベンチに一人アコースティックギターで弾き語りをしているおじさんがいた。麦わら帽子を被っており、顔には白い髭をたくさん生やしていた。傍にキャリーケースなどの大荷物が置いてあったところから見ると旅をしながらのストリートミュージシャンだったかもしれない。
その麦わら帽子のおじさんの奏でる音楽と深みのある声に、いつの間にか惹かれた男と愛璃は遊ぶのを中止して麦わら帽子のおじさんの歌を聴いていた。二人が夢中になって聴いていると、麦わら帽子のおじさんがニコッと笑いかけてきた。
「お、おじさん。それどうやって弾くの？」
「あ、おい、愛璃。それはオレが聞きかったんだぞっ！」
「ほっほっほ。実際に持ってみるかい？」
麦わら帽子のおじさんの隣に座って、愛璃も男もそのギターを触らせてもらった。当時、まだ小さかった二人にとって、そのギターは大きすぎる品物だった。麦わら帽子のおじさんに「ここをこうやって弾いてごらん？」と教えてもらった通り、弦を弾いてみると、ジャランという音色が零れていった。男も愛璃も面白がって、色々なところから弦を弾いていく。ジャランジャランと音は定まらないものの、夢中に楽しそうに二人は弾いていた。
やがて夕方頃になり、帰る時間になった男と愛璃が名残惜しそうに麦わら帽子のおじさんに挨拶して帰ろうとしたときだった。
「二人にこれをやろう。大きくて少しお古だがまだまだ現役の子じゃ」
そう言いながら麦わら帽子のおじさんが男と愛璃に渡したのは、二本のアコースティックギター。男には深みのある茶色、愛璃には黒色のギターが贈

られた。麦わらのおじさん曰く、万が一の場合に備えた予備用のギターらしかった。男は「いいのかよ、もらっちゃってよ」と言うと麦わら帽子のおじさんはまたニコッと笑みを浮べながら言った。

「ほっほっほ。ここで会ったのもきっと何かの縁。そのギター達も常に使ってもらえる人に渡った方が幸せというものじゃ。こうやって音楽で何かを届けること……ほっほっほ。やはり音楽は素晴らしいものじゃ」

「おじさん、なんか話がむずかしいよぉ」

「ほっほっほ。いずれ、分かるときがくるさ」

【六】

情けないと思った。

それとも不甲斐ないという言葉の方が適切か、いや今はそんなことはどうだっていい。男の頬に幾筋の溶けた感情が伝っていた。そうだ、あのとき、自分はあの麦わら帽子のおじさんに惹かれて、音楽に惹かれて、ここまで来たんだと男は思い出した。そしてあの麦わら帽子のおじさんがしてくれたように、自分も音楽で何かを届けられるように、贈られるようになりたいと思った。そんな大事なことを忘れていた。

「てっちゃん……?」

いきなり泣き出した男に愛璃は驚いた。男は「ありがとな、愛璃」と言うと歩き出した。場所は放置されたままで埃をかぶっている一本の深みのある茶色に染まったアコースティックギター。

男が手に取り、ストラップを肩にかけると弾き始めた。あの日から一、二週間ほど触ってなかったので、男はまず、とりあえず適当に弾いて指を慣らしていく。すごい久しぶりな気がしたが……それでも男の指はすぐに慣れていった。まるで、このギターが弾かれるのを喜んでいるかのような、そんな音色が響いていた。

「じゃあ……一曲歌うから」

「うん!」

男の吹っ切れたような顔を見て、何かを察した愛璃が笑顔で応えると、それを合図に男はギターの音に乗せて歌い始めた。それは昔、男が初めて作ってみた曲だった。

あの日くれた音色は
未来（あす）に繋がる色に変わって
今もこの胸に
鳴り響いている

あの日キッカケをくれた、麦わら帽子のおじさんに想いを馳せながら作った一曲を男は心から歌った。あの日麦わら帽子のおじさんからもらった音色が、男の心にまた活気を与えていく。無我夢中に歌って、そしてやがて曲が終わると愛璃が大きな拍手を送っていた。

「てっちゃん……ありがと」

「愛璃……!?」

歌い終わって、男はすぐに愛璃の異変に気がついた。愛璃の体がなんだか光輝いているような気がする。いや、気のせいなんかじゃなかった。間違いなく愛璃の体が眩しく輝きを放っていた。

「えへへ。実はね、私ね、この前、事故しちゃってさ。ようやくてっちゃんと同じところに上京できるっていう前日の日にね」

「ま……まさか、お前」

信じられないという男の顔に愛璃は「違う違う」と慌てて手を振った。

「まだ、死んでないよ!ただ大怪我しちゃったみたいで手術しなきゃいけないみたいなの……成功しない可能性もあるって聞かされて、それが怖くて……そしたらね、こんな風に幽体離脱しちゃった」

「……しちゃった、ってお前……」

「えへへ。それでね、手術する前に、てっちゃんに会いたくなって、てっちゃんの歌を聴きたくてここまでやってきて……そしたらビックリ!てっちゃんったら、めっちゃ暗かったんだもん。驚いたよ」

「愛璃……」

「私の歌も聴いてくれないし……まぁ酔ってて覚えてないかもだけど」
「昨日……？　……ワリィ、記憶飛んでるみたいだわ」
「だろうね。まぁ、そこはいいんだけど」
愛璃を包み込んでいる輝きが更に強くなっていく。男は思わず「愛璃！」と叫んだ。
「大丈夫だよ、てっちゃん。私は元の体に戻るだけだから、分かるんだ、なぜかね。てっちゃんの今の姿に、歌にすごい勇気もらったよ。だから手術もきっと大丈夫！　ありがとね、てっちゃん」
「愛、璃……」
「そんな悲しそうな顔しないでよ。手術成功して、リハリビして、退院できたら私もてっちゃんと同じ場所に上京するから。そのときは一緒に――」
最後の言葉は光と共に消えていった。
愛璃がいなくなって、部屋に一人残った男は暫く呆然としてから思った。
明日から部屋の掃除をしよう、バイトも店長に頭下げて再開しよう、そして――。
明日からまたあの路上で歌っていこう。
「おじさん……歌って、音楽って、やっぱりすげぇんだな」

【七】

そこは都内のライブ会場。
会場の熱気は最高潮のようで、観客は小型で棒状タイプのライトを思いっきり振りながら大きな声援を飛ばしまくっている。
そしてスポットライトいっぱいに浴びられている大きい演奏ステージの前衛には、二人の男女がアコースティックギターを力強く奏でながら、飛び散る汗と共に腹の底から歌声を観客へと贈っていた。

失敗しても
再び走り出せる力を俺たちは持ってる
最初の一歩を踏み出した日を思い返せ
ここで終わっちゃダメだって
きっと背中を押してくれるから

やがてその曲が終わると、どうやらMCタイムへと入るようで、めいっぱい歌ってきて汗だくの男は近くに置いてあったペットボトルを取り、一口飲んで喉を潤すと、呼吸を整え、やがて話し始めた。
「えっと……今日は皆、俺たちの音楽を聴いてくれてありがと」
「よっ、流石は我らがてっちゃん！」
観客から聞こえてくる笑い声に、てっちゃんと呼ばれた男は「後で覚えてろよ」と隣にいる彼女に苦笑いを浮かべながら言うと、続きを話す。
「そのライブの度に繰り返してる話だけど……なんていうか音楽って、歌うことってすごいんだなって思ってる。こうやって皆に活気を与えたり、もちろん俺たちにも」
恥ずかしそうに言う男に隣にいる彼女が「代わろうか？」と声をかけてくるが、「余計なお世話だ」と男はまた苦笑いをつけて返すと続けた。
「こんな風に、音楽で歌で誰かに何かを贈ることができることを、俺たちは誇りに思ってる。今日は本当に皆、ありがとう。ドラムサポートのやっさん、ベースサポートのなべやん、キーボードサポートのガラっちも、長いツアーお疲れ様、ありがと。それと……相棒の愛璃」
「ん？　な～に？」
「いつも、ありがとな」
観客からヒューヒューと声が上がっている。男は「お前らなぁ」とツッコミを入れると観客からは笑いが起こった。その笑いがやがて止むと、男は一息入れてから――。
「それじゃ、今回のツアー、最後に飾るのはこの曲で。麦わらアコーズで――」
「『ｓｏｎｇ　ｆｏｒ』」